

子育ての男女意識差と 幸福度への影響要因に関する分析

坂田 美和¹・秀島 栄三²

¹非会員 名古屋工業大学 ダイバーシティ推進センター (〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町)

E-mail:sakata.miwa@nitech.ac.jp

²正会員 名古屋工業大学 大学院 工学研究科 (〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町)

E-mail:hideshima.eizo@nitech.ac.jp

「幸福度」を地域政策に活用することを目指した取組みが進められている。また、近年注目されているワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）においては、子育てに関する男女意識差の存在が明らかとなっている。本研究の目的は、子育て意識の中で、幸福度に影響を及ぼす要因を明らかにすることである。これにより、女性にみられる子育てと幸福度の負の関係を改善し得る方策を考察することをねらいとしている。2016年に行われた安城市の市民幸福度に関するアンケート調査を基に、統計分析を行った。その結果、男女の意識に有意な差のある要因は「近くに頼れる存在」「自分の役割がある」であり、最も幸福度に影響のある要因は、女性では「家族関係良好」、男性では「家族の子育ての理解協力」であることが明らかになった。

Key Words : *Happiness-satisfaction, Parenting, Gender, Consciousness difference*

1. 本研究の目的

幸福度指標を政策評価に導入しようとする動きが広がっており、「国民総幸福量 (GNH)」を政策判断の基準として活用しているブータンをはじめとして、近年では、日本、フランス、英国、アメリカ、ドイツ、フィンランド、オーストラリアなどの多くの国で幸福度を導入しようとする動きがみられる。また、OECD等の国際機関が幸福度指標の作成に向けた検討を進めるなど各国が連携しながら取組む動きもみられる。

こうした動きは中央政府や国際機関に限らない。わが国の多くの地方自治体では幸福度の導入に向けた取組みが進められている¹⁾。この取組みの中、少子化問題を抱える現代社会において、一人でも多くの親が幸福を感じながら子育てができるように子育て支援サービスが重要視されてきている。また、核家族化、都市化などにより、従来の血縁・地縁による子育て支援の弱体化から、地域による育児ネットワークの展開も進んでいる。しかし、子どもを持つ女性は子どもを持たない女性より幸福度が相対的に低いという研究事例もみられる²⁾。また、近年ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）に注目が集まっているが、男女によりその捉え方や実践方法が異なることが明らかとなっている³⁾。

そこで本稿では、子育て意識において男女差のある要因を特定し、その要因が幸福度にどの程度影響を及ぼすかを分析することで、女性にみられる子育てと幸福度の負の関係を改善するための方策を考察することをねらいとする。

2. 対象調査概要

2016年に行われた安城市の市民幸福度に関するアンケート調査を基に、統計分析を行った。調査対象区域は、愛知県安城市の全域であり、母集団は、安城市在住の満18歳以上の男女個人である。安城市住民基本台帳から市の年齢別人口構成比に応じて無作為抽出し、標本数は3000人である。平成28年9月24日から10月18日の調査実施期間で、郵送配布・郵送回収にて実施され、回収数は、1660 (55.3%)であった。18分野（「健康・医療」「地域福祉」「社会保障」「環境」「生活安全」「防災・減災」「都市基盤（住環境）」「都市基盤（交通）」「都市基盤（市街地）」「農業」「商工業」「観光」「子育て」「学校教育」「生涯学習」「文化・芸術」「スポーツ」「参加と協働」）に関する調査項目から、本研究では「子育て」分野の調査結果を使用した。

本研究で使用したアンケートの設問項目は次のとおりである。【 】内は、以降略記として使用する。

(1) 子育て分野に関する調査

◆ 各分野でのあなたの意識をおたずねします
 次の各質問（問1から問44）について、あなたの感じ方の度合いに応じて、1から5までの数字のどれか1つに○印を付けてください。1が「まったく感じない」、5が「大いに感じる」となります。わからない場合は、0の「わからない」にのみ○印を付けてください。

表-1 人とのつながりについて

No.	質問内容
問33	家族関係は良好だと感じますか？ 【家族関係良好】
問34	近くに困った時に頼れる人や相談できる人がいると感じますか？ 【近くに頼れる存在】
問35	家庭や職場、学校、地域など、いずれかで自分の役割があると感じますか？ 【自分の役割がある】
問36	あなたのまわりでは、文化や言語が自分と異なる人々を理解しようとする雰囲気を感じますか？ 【異種の理解】
問37	隣近所や地域コミュニティとつながりながら暮らしていると感じますか？ 【つながりある暮らし】

表-2 子育て・教育について

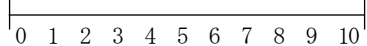
No.	質問内容
問38	お子さんが規則正しい生活習慣を身につけていると思いますか？ 【子の生活習慣】
問39	お子さんが、社会で生活していく上で必要な知識や技能、社会性、体力などを日々身につけていると思いますか？ 【子の知識、社会性】
問40	親子の間でコミュニケーションがとれていると感じますか？ 【親子のコミュニケーション】
問41	あなたのご家族、ご親族は、子育てに関する理解や協力があると感じますか？ 【家族の子育ての理解協力】
問42	お住まいの地域における子育て・教育に関する事業・サービス・施設などが充実していると思いますか？ 【子育てサービスの充実】
問43	お住まいの地域に、子育て家庭に対して理解し、協力する雰囲気があると感じますか？ 【地域の子育ての理解協力】
問44	お子さんが健やかに成長していると感じますか？ 【子の健やかな成長】

※「子育て・教育について」は、同居している18歳未満の子がいる回答者のみが回答。

(2) 現在の幸福度に関する調査

◆ あなたの幸福度（幸福感）についておたずねします

表-3 幸福度について

No.	質問内容
問47	現在、あなたはどの程度幸せですか？「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。あなたの実感に最も近い数字どれか1つに○印を付けてください。  【現在の幸福度】

(3) 個人属性に関する調査

◆ あなたご自身についておたずねします

表-4 個人属性について

No.	質問内容
問50	あなたの性別を教えてください。あてはまる番号に1つだけ○印を付けてください。 1 男性 2 女性 【性別】
問58	同居している18歳未満のお子さんがいらっしゃる方におたずねします。該当するそれぞれについて人数を記入してください。 1 0歳～小学校入学前 () 人 2 小学生 () 人 3 中学生 () 人 4 中学卒業～18歳未満 () 人 【子同居あり/子同居なし】

問58については、人数記載のある回答者を【子同居あり】、人数記載のない回答者を【子同居なし】として分析に用いた。

3. 分析方法

子育て意識の感じ方の度合いと幸福度のそれぞれにおいて男女の平均値比較を行った。比較検定はWilcoxonの符号付順位検定を用いた。

また、子育て意識の感じ方の度合いと幸福度の相関関係をSpearmanの順位相関係数を用いて求めた。相関の強さの判定値⁴⁾については、表-5を参照した。

表-5 相関の強さの判定値

r の値	相関の強さの判定
.00～±.20	ほとんど相関がない
±.20～±.40	弱い相関がある
±.40～±.70	中程度の相関がある
±.70～±1.00	強い相関がある

4. 分析結果

(1) 調査項目の統計

a) 子育て意識の統計

子育て意識の回答数を、男性については表-6、女性については表-7に示す。「子育て・教育について」は、「同居している18歳未満の子がいる回答者のみが回答」という制約が存在するため、同居している18歳未満の子の人数(問58)の回答者【子同居あり】を抽出した。このため、男性689人、女性921人(全回答者数1660人、無回答50人。)の中で、それぞれ半数以上が未該当となった(表-8)。

b) 幸福度の統計

「幸福度」の回答数を、男性については表-9、女性については表-10に示す。

表-8 回答該当者数

全回答者数 1660人				
無回答	男性 689人		女性 921人	
50人	該当	未該当	該当	未該当
	180人	509人	338人	583人

表-9 幸福度の回答数 (男性)

男性 (n = 180)	0	1	2	3	4	5	
問47 (現在の幸福度)	0	0	3	5	4	14	
	6	7	8	9	10	計	
	23	56	51	11	13	180	

表-10 幸福度の回答数 (女性)

女性 (n = 338)	0	1	2	3	4	5	
問47 (現在の幸福度)	1	4	5	11	17	37	
	6	7	8	9	10	計	
	33	60	80	38	52	338	

表-6 子育て意識の回答数 (男性)

男性 (n = 180)	0	1	2	3	4	5	計
問33 (家族関係良好)	1	2	6	38	69	63	179
問34 (近くに頼れる存在)	0	15	24	64	58	18	179
問35 (自分の役割がある)	3	6	10	57	74	28	178
問36 (異種の理解)	36	16	31	64	27	5	179
問37 (つながりある暮らし)	6	17	31	78	43	4	179
問38 (子の生活習慣)	5	3	18	64	65	20	175
問39 (子の知識、社会性)	6	5	9	64	78	13	175
問40 (親子のコミュニケーション)	5	2	9	41	85	33	175
問41 (家族の子育ての理解協力)	0	6	5	36	80	47	174
問42 (子育てサービスの充実)	6	9	21	70	55	13	174
問43 (地域の子育ての理解協力)	12	7	19	78	49	10	175
問44 (子の健やかな成長)	1	5	1	25	83	60	175

表-7 子育て意識の回答数 (女性)

女性 (n = 338)	0	1	2	3	4	5	計
問33 (家族関係良好)	0	7	10	65	122	131	335
問34 (近くに頼れる存在)	5	15	44	73	105	95	337
問35 (自分の役割がある)	7	9	21	85	113	103	338
問36 (異種の理解)	48	26	57	132	59	16	338
問37 (つながりある暮らし)	9	36	73	135	67	18	338
問38 (子の生活習慣)	3	5	29	101	125	61	324
問39 (子の知識、社会性)	7	3	17	120	127	49	323
問40 (親子のコミュニケーション)	3	1	6	83	123	107	323
問41 (家族の子育ての理解協力)	1	6	18	50	128	119	322
問42 (子育てサービスの充実)	19	13	37	101	111	42	323
問43 (地域の子育ての理解協力)	23	15	47	123	87	28	323
問44 (子の健やかな成長)	3	1	6	48	109	155	322

(2) 子育て意識と幸福度に関する分析

子育て意識の回答数(表-6, 表-7)と幸福度の回答数(表-9, 表-10)の男女差を図-1に示す。男女の回答数が異なるため、各回答の割合を算出し比較した。

ほぼすべての項目に共通で見られる傾向として、回答の中間値よりやや高い値付近までは男性の回答割合が高いが、回答の最高値(問33~44では5, 問47では10)では、反転して女性の回答割合が高くなっていることがあげられる。これにより、本アンケート調査地域のみの特徴である可能性もあるが、子育て意識の感じ方の度合いと幸福度は、男性については中程度、女性については強いと考察される。

a) 子育て意識の男女差

子育て意識の男女差として、子育て意識(問33~問44)の平均およびWilcoxonの符号付順位検定の結果を表-11, 図-2に示す。なお、各設問の無回答と、回答「0」の「わからない」については除外して算出した。

ほぼすべての項目に対して、女性の平均値が男性を上回っており、「問34(近くに頼れる存在)」「問35(自分の役割がある)」の2項目において、1%水準で有意な差がみられ、「問38(子の生活習慣)」「問40(親子のコミュニケーション)」「問42(子育てサービスの充実)」「問44(子の健やかな成長)」の4項目において、5%水準で有意な差がみられた。これより、これらの項目に子育て意識における男女差があり、男性よりも女性の意識が強いことを示した。

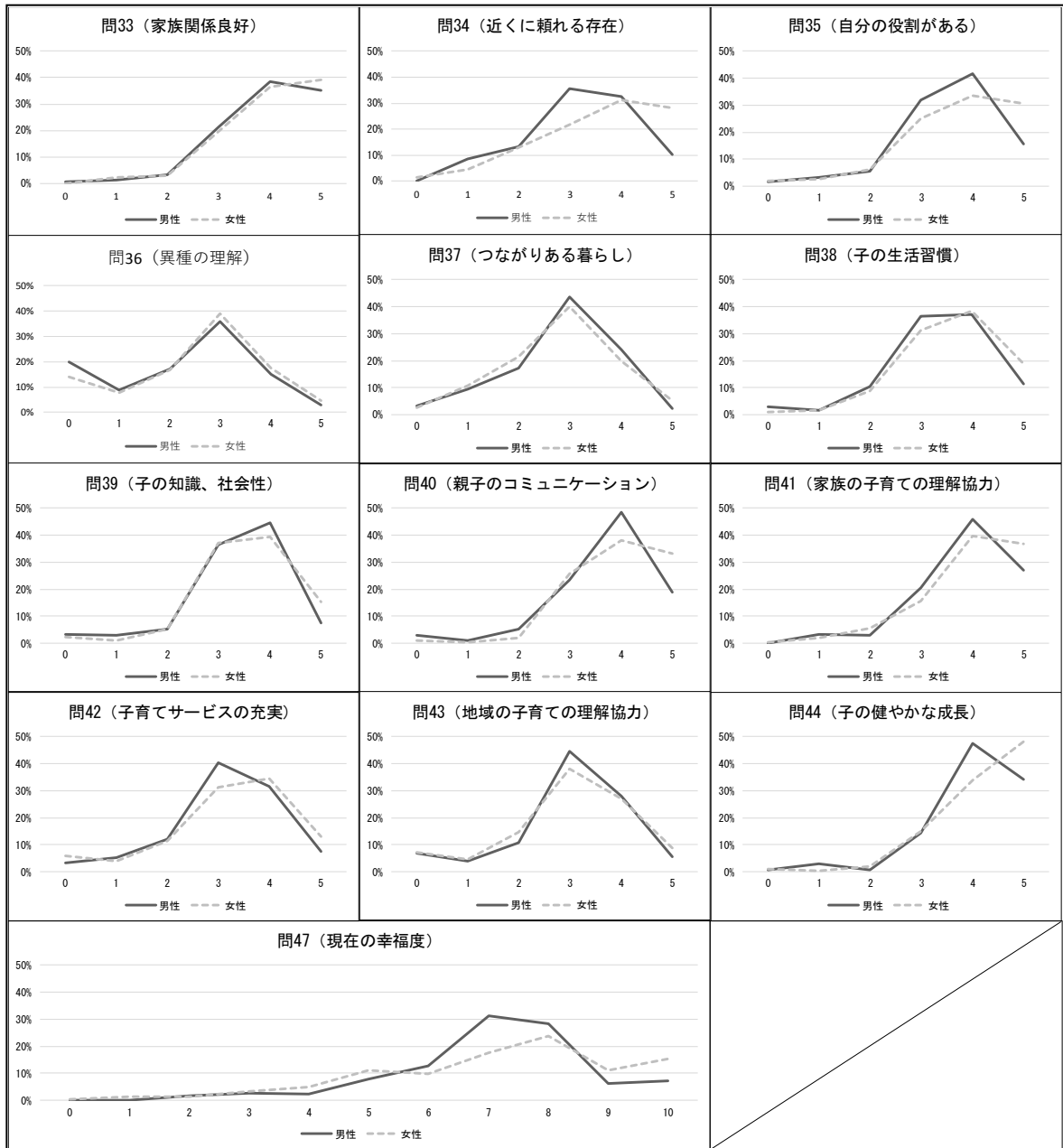


図-1 回答数の男女差

表-11 子育て意識の男女差

	男性		女性		p値
	N	平均	N	平均	
問33 (家族関係良好)	178	4.0393	335	4.0746	0.5024
問34 (近くに頼れる存在)	179	3.2235	332	3.6657	0.0000**
問35 (自分の役割がある)	175	3.6171	331	3.8459	0.0061**
問36 (異種の理解)	143	2.8182	290	2.9379	0.2644
問37 (つながりある暮らし)	173	2.9191	329	2.8723	0.4643
問38 (子の生活習慣)	170	3.4765	321	3.6480	0.0429*
問39 (子の知識、社会性)	169	3.5030	316	3.6392	0.1869
問40 (親子のコミュニケーション)	170	3.8118	320	4.0281	0.0125*
問41 (家族の子育ての理解協力)	174	3.9023	321	4.0467	0.0550
問42 (子育てサービスの充実)	168	3.2500	304	3.4342	0.0421*
問43 (地域の子育ての理解協力)	163	3.2209	300	3.2200	0.9858
問44 (子の健やかな成長)	174	4.1034	319	4.2884	0.0152*

* : 5%水準で有意 ** : 1%水準で有意

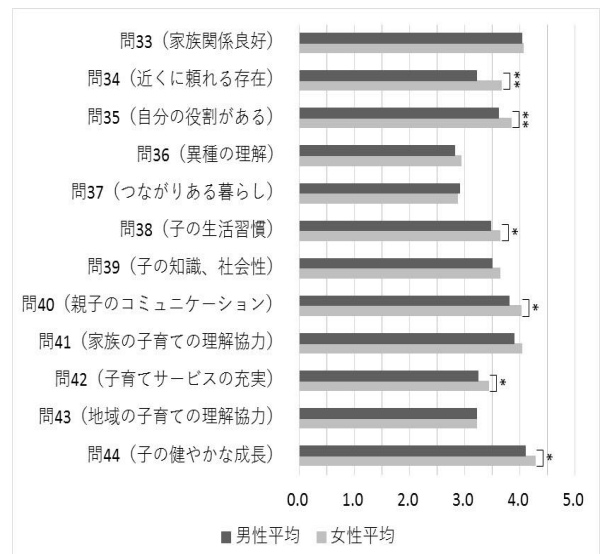


図-2 子育て意識 平均値の男女差

b) 幸福度の男女差

幸福度の男女差として、幸福度（問47）の平均および Wilcoxon の符号付順位検定の結果を表-12、図-3に示す。

幸福度に対しても、女性の平均値が男性を上回っており、幸福度に男女の意識差があり、男性よりも女性の意識が強いことを示したが、有意な差がみられる程ではなかった。

c) 幸福度に影響を及ぼす子育て意識要因

幸福度に影響を及ぼす子育て意識要因として、子育て意識（問33～問44）と幸福度（問47）との相関分析の結果を表-13に示す。

「問33（家族関係良好）」「問34（近くに頼れる存在）」「問35（自分の役割がある）」「問40（親子のコミュニケーション）」「問41（家族の子育ての理解協力）」「問42（子育てサービスの充実）」「問44（子の健やかな成長）」の7項目において、女性に中程度の有意な相関がみられた。「問42」については、女性にのみ幸福度に影響を及ぼす要因であるといえる。これより、地域における子育て・教育に関する事業・サービス・施設などの充実を感じていると幸福感を得られることは、女性側にかなり強い傾向があるといえる。その他「問33」「問34」「問35」「問40」「問41」「問44」については、男性にも弱い有意な相関がみられ、男女ともに幸福度に影響を及ぼす要因であるといえる。これより、

表-12 幸福度の男女差

	男性		女性		p値
	N	平均	N	平均	
問47（現在の幸福度）	180	7.0778	338	7.1598	0.2153

*: 5%水準で有意 **: 1%水準で有意



図-3 幸福度 平均値の男女差

表-13 子育て意識と幸福度の相関 (Spearmanの順位相関係数(ρ))

	幸福度 男性	幸福度 女性
問33（家族関係良好）	0.2745**	0.5576**
問34（近くに頼れる存在）	0.2609**	0.4500**
問35（自分の役割がある）	0.2968**	0.4880**
問36（異種の理解）	0.2114*	0.3000**
問37（つながりある暮らし）	0.0320	0.3194**
問38（子の生活習慣）	0.0623	0.3284**
問39（子の知識、社会性）	0.1701*	0.3887**
問40（親子のコミュニケーション）	0.3050**	0.4014**
問41（家族の子育ての理解協力）	0.3648**	0.4838**
問42（子育てサービスの充実）	0.1315	0.4252**
問43（地域の子育ての理解協力）	0.1323	0.3449**
問44（子の健やかな成長）	0.3017**	0.4447**

*: 5%水準で有意 **: 1%水準で有意

これらの項目の感じ方の度合いが高いと幸福感が得られることは、女性側に少し強い傾向があるといえる。

「問36（異種の理解）」には、男女ともに弱い相関がみられた。これより、文化や言語の異なる人々を理解しようとする雰囲気を感じていると幸福感を得られることに男女差はないが、それにより幸福を感じられることは弱い傾向であるといえる。

「問39（子の知識、社会性）」には、女性に弱い相関がみられたが、男性には有意にほぼ相関がみられなかった。これより、子が、社会生活上で必要な知識や技能、社会性、体力などを日々身につけていると感じていると幸福感を得られることは、女性には弱い傾向があるが、男性にはほぼないことがいえる。

また、幸福度との相関が有意に高い項目は、男性では「問41（家族の子育ての理解協力）」、女性では「問33（家族関係良好）」であった。これより、子育て意識の中で、男性において最も幸福度に影響を与える要因は、家族、親族が、子育てに関する理解や協力があると感じることであるといえ、女性において最も幸福度に影響を与える要因は、家族関係が良好だと感じることであり、一方、相関が有意に低い項目は、男性では「問39（子の知識、社会性）」、女性では「問36（異種の理解）」であった。これより、子育て意識の中で、男性において最も幸福度に影響を与えることのない要因は、子が、社会生活上で必要な知識や技能、社会性、体力などを日々身につけていると感じることであるといえ、女性において最も幸福度に影響を与えることのない要因は、文化や言語の異なる人々を理解しようとする雰囲気を感じることであるといえる。

d) 子育て意識差と幸福度

これまでの結果をまとめて考察するために、子育て意識の男女差（表-11）と子育て意識と幸福度の相関（表-13）とを統合した結果を表-14に示す。表-13で男女ともに有意であった項目を抽出し、「男女差（相関）」列に相関係数の差を、「差順位」に相関係数の差の順位を、「男女差（平均）」列にa) 子育て意識の男女差で行った Wilcoxon の符号付順位検定の結果を示し、「差順位」

表-14 幸福度の相関と男女差 (Spearmanの順位相関係数(ρ))

	幸福度 男性	幸福度 女性	男女差 (相関)	差順位	男女差 (平均)
問33	0.2745**	0.5576**	0.2831		1
問39	0.1701*	0.3887**	0.2186		2
問35	0.2968**	0.4880**	0.1912		3**
問34	0.2609**	0.4500**	0.1891		4**
問44	0.3017**	0.4447**	0.1430		5*
問41	0.3648**	0.4838**	0.1190		6
問40	0.3050**	0.4014**	0.0964		7*
問36	0.2114*	0.3000**	0.0886		8

*: 5%水準で有意 **: 1%水準で有意

の順に並べ替えを行った。

幸福度との相関の男女差が大きい項目は「問33 (家族関係良好)」「問39 (子の知識, 社会性)」であった。一方, 男女差が小さい項目は, 「問36 (異種の理解)」「問40 (親子のコミュニケーション)」であった。

子育て意識の男女差(「男女差(平均)列」)に着目すると, 子育て意識で男女差1%水準で有意であった「問34 (近くに頼れる存在)」「問35 (自分の役割がある)」、5%水準で有意であった「問40 (親子のコミュニケーション)」「問44 (子の健やかな成長)」がみられる。これらより, 本アンケート調査地域のみの特徴である可能性もあるが, この4項目については, 意識差のあることが, 幸福度の差を生じさせる要因であることが考えられる。性別のような属性により影響度は変化することも考えられるが, 意識を高めることにより幸福度を高めることが可能になるのではないかと考える。

5. おわりに

子育て世帯(本研究では「同居している18歳未満の子がいる回答者」とする)を対象に, 子育て意識について, 男女による比較分析を行い, 男女差のある要因を特定した。さらに, 幸福度に影響を及ぼす要因を分析し, その影響度合いについての男女差を示した。

比較分析では, 「近くに頼れる存在」「自分の役割がある」「子の生活習慣」「親子のコミュニケーション」「子育てサービスの充実」「子の健やかな成長」において男女差があり, 女性の意識が有意に高いことを示した。

幸福度に影響を及ぼす要因分析では, 男女共通の要因として, 「家族関係良好」「近くに頼れる存在」「自分の役割がある」「親子のコミュニケーション」「家族の子育ての理解協力」「子の健やかな成長」があげられ, 女性側に少し強い傾向があることを示した。女性のみ要因としては, 「子育てサービスの充実」があげられた。このうち, 最も幸福度に影響を与える要因は, 男性では「家族の子育ての理解協力」であり, 女性では「家族関係良好」であることを示した。一方, 幸福度に影響を及ぼすことがほぼない要因として, 男性側に「子の知識, 社会性」がみられることも示した。

これらの結果から, 幸福度に影響を及ぼす男女共通の要因の, 感じ方の度合いをあげられるような「家族交流と地域交流」を行うことにより, 全体的な幸福度の向上が期待できると考える。特に比較分析で有意な差のあった「近くに頼れる存在」「自分の役割がある」の男性の意識向上に有効である可能性が高いが, 意識が低い分, 参加の動機付けに問題が考えられる。また, 女性のみ要因としてあげた, 「子育てサービスの充実」をより進めると, 子育て世帯の女性の幸福度の向上が期待できるといえる。しかし, 男女で協力して子育てを行う傾向が進むにつれ, これは女性のみでなく子育て世帯全体の幸福度向上に繋げることが可能であると考えられる。最後に, 男性に「子の知識, 社会性」の感じ方の度合いをあげられるような「父子防災訓練」などを行うことを提案する。本アンケートでは男女で同様の地域, 同様の家庭, 同様の子供についての設問をしているのに対し, 男性に低い傾向の意識差があることは, 男性の子育てへの関心の低さが感じられる。「子の知識, 社会性」を感じることでより幸福感を得られ, 男性の子育てへの意識が高まると, 女性の幸福度に影響を及ぼす要因が自然と満たされると考える。

これまでに述べてきた方策を行うことにより, 女性の幸福度の向上が期待でき, 女性にみられる子育てと幸福度の負の関係を改善していけるのではないかと考える。

謝辞: 本研究では, 安城市みらい創造研究所平成28年度市民幸福度アンケート調査の結果を用いている。記して謝意を表す。

参考文献

- 1) 荒川区総務企画部総務企画課:平成 27 年度荒川区民総幸福度(GAH)に関する区民アンケート調査, 2016.
- 2) 上田路子, 川原健太郎:子どもを持つ若年層を対象とした幸福度に関する研究, ESRI Discussion Paper Series, NO.295, pp.1-24, 2013.
- 3) 鍋山祥子:男女によって異なるワーク・ライフ・バランスについての意識, 山口経済学雑誌, NO.61-4・5, pp.347-363, 2013.
- 4) 平井明代:教育・心理系研究のためのデータ分析入門, 東京図書, 2012.
- 5) 神永希, 杉本達哉, 奥平詠太:幸福度からみた都市と地方の比較, 2018.

(2018.???.?? 受付)

ANALYSIS ON GENDER DIFFERENCES IN PARENTING CONSCIOUSNESS AND INFLUENCE FACTORS ON HAPPINESS

Miwa SAKATA, Eizo HIDESHIMA